＜中学国語＞

語感を磨き語彙を豊かにする授業の工夫

―互いに作文を読み合う活動を通して―

宜野湾市立宜野湾中学校　教諭　大城　荒

目　次

Ⅰ　テーマ設定の理由・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
Ⅱ　研究構想図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
Ⅲ　研究内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
　1　研究内容１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
　（1）　言葉の定義 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
　（2）　「記憶」7 つの特性 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
　（3）　言語事項を作文で指導 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
　2　研究内容２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
　（1）　メタ認知 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
　（2）　アクティブ・ラーニング ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
　（3）　対話的な学び ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
　3　研究内容３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
　（1）　振り返り ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
　（2）　パフォーマンス評価 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
Ⅳ　検証授業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
　1　単元名・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
　2　単元の目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
　3　単元について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
　4　単元の評価規準・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
　5　単元指導計画・評価計画・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
　6　本時の指導・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
　7　検証授業研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
　（1）授業者の反省 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
　（2）意見及び感想 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
　（3）指導助言（琉球大学教育学部教授　武藤清吾氏）　・・・・・・・・・・・・・54
Ⅴ　仮説の検証・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・55
　1　理論の有効性の検証（全体）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・55
　（1）「記憶の特徴」から見える変容 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・55
　（2）「協同学習」「メタ認知」の側面から見える変容 ・・・・・・・・・・・・・・56
　（3）「パフォーマンス評価」の側面から見える変容　・・・・・・・・・・・・・・57
　2　授業計画の有効性の検証（全体と抽出生徒）・・・・・・・・・・・・・・・・・58
　（1）授業計画の有効性の検証（全体）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・58
　（2）授業計画の有効性の検証（抽出生徒）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
　3　検証のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
Ⅵ　研究の成果と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
　1　研究の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
　2　今後の課題と対応・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
　＜参考文献＞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60

〈中学校国語〉

語感を磨き語彙を豊かにする授業の工夫
―互いに作文を読み合う活動を通して―

宜野湾市立宜野湾中学校　教諭　大城　荒

Ⅰ　テーマ設定の理由

グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により，社会構造や雇用環境は大きく，また急速に変化している。こうした変化の一つとして，人工知能(Artifical Intelligence)の飛躍的な進化があり，平成 28 年の情報通信機器（スマートフォン・パーソナルコンピューター等）の世帯普及率は 94.7％まで上昇している。高度情報社会において，メールや SNS（social networking service）といった言葉でのコミュニケーションを取り巻く環境が多様化する中で，国語科が担うべき役割はますます重要なものとなっていると考える。

平成 30 年度全国学力・学習状況調査において本校の結果をもとに分析を行ったところ，「話す・聞く能力」「読む能力」においては全国平均以上，「書く能力」においては全国平均並み，しかし「言語についての知識・理解・技能」においては全国平均以下という結果であることがわかった。

学習指導要領（平成 29 年３月告示）において「語感を磨き語彙を豊かにする」とは「意味を理解している語句の数を増やすだけでなく，話や文章の中で使いこなせる語句を増やすとともに，語句の意味や使い方に対する認識を深め，語感を磨き，語彙の質を高める」と定義されている。

「言語について」の授業を振り返ると，インプット中心の学習活動が多い。その方法は短期間に「意味を理解している語句の数を増やす」には，効率のよい学習方法ではある。しかし「話や文章の中で使いこなせる語句を増やす」ということにおいては，効果があるとは考えにくい。要領では，その指導方法として，「語句を話や文章の中で使うことを通して，社会生活の中で使いこなせる語句を増やし，確実に習得していくことが重要である」としている。

そこで想像したのは，学習者が日常的に「ことば」に興味や関心を持つようになる授業である。文章の一場面において，言葉を別の言葉に置き換えてみる。語感の違いを感じると同時に，筆者がなぜその「ことば」を選んだかを意識するようになるのではないだろうか。そうした発見の驚きと喜びは，学習者自らが日常的に「ことば」に興味や関心を持ち，「ことば」を探し，「ことば」を集め，「ことば」を選ぶことにつながると考える。

そうした活動の後に表現活動，交流活動といった学習活動を続けたい。自らが選んだその「ことば」はやがて，鮮やかな描写，細かなニュアンスといった，一人一人の個性的で多様な表現となり，さらに，その表現を他者と交流し合うことで，相互に「ことば」を磨いていくのではないだろうか。交流活動の中で級友の「ことば」に着目し，その意図を想像することができたのならば，それをこの授業においての「変容」としたい。

授業において，そうした意識を学習者に育むことができたならば，日々の生活で見たり聞いたりすること全てが学習の場となり得る。それは授業の時間とは比較できないほど長く，そして豊かな時間となると考え，このテーマを設定した。

Ⅱ　研究構想図

研究テーマ
語感を磨き語彙を豊かにする授業の工夫
―互いに作文を読み合う活動を通して―

学校教育目標
○進んで学習する生徒
○思いやりのある生徒
○心身ともにたくましい生徒

生徒の実態
○言語事項について生活の場で活用できていない
○文章を書くことに苦手意識を持っている

学校・教師の実態
○言語事項についてインプット型の学習活動が多い
○「書く」楽しさを実感させる作文指導に課題

家庭・地域の実態
○読み聞かせボランティアの積極的な活動が行われている
○表現語彙が少ないと感じる時がある

目指す生徒像
○日常生活の中で「ことば」に興味・関心を持つ生徒
○他者と共に「ことば」について語りあう生徒
○よりよい「ことば」について考える生徒

研究目標
日常的に「ことば」を探し，「ことば」を集め，「ことば」を選ぶ生徒の育成

研究の基本仮説
「言語について」学習する場面において，語感や言葉の使い方に対する感覚を意識して作文を書き，読み合う活動をすることによって，日常生活において語感を磨き語彙を豊かにするようになるであろう。

社会的背景
○グローバル化の進展，技術革新等による社会構造・雇用環境の変化
○高度情報社会における言葉によるコミュニケーションの多様化

県教育施策
○学力向上推進プロジェクト
○わかる授業 SupportGuide
○「問い」が生まれるサポートガイド

市教育施策
○宜野湾市の学校教育
○宜野湾市教育振興基本計画

具体仮説１
語句を話や文章の中で使うことで，語句の理解が深まり，表現語彙として定着するであろう。

研究内容１
(1)言葉の定義
(2)記憶の特徴
(3)言語事項を身につけさせる作文指導

具体仮説２
書いた文章を読み合うことで，文章表現の効果と意図を考えるようになるであろう。

研究内容２
(1)メタ認知
(2)アクティブ･ラーニング
(3)対話的な学び

具体仮説３
文章表現の効果と意図を考えることで，日常生活において語感を磨き語彙を豊かにするようになるであろう。

研究内容３
(1)振り返り
(2)パフォーマンス評価

検証授業の計画・実践・分析・考察

研究のまとめ・研究成果と今後の課題

Ⅲ　研究内容

１　研究内容１

（１）言葉の定義

学習指導要領（平成 29 年３月告示）解説において,「語感を磨き語彙を豊かにするとは，自分の語彙を量と質の両面から充実させることである。具体的には，意味を理解している語句の数を増やすだけでなく，話や文章の中で使いこなせる語句を増やすとともに，語句の意味や使い方に対する認識を深め,語感を磨き，語彙の質を高めることである。なお，語感には，言葉の正しさや美しさだけではなく，その言葉が使われる際に適切であるかどうかを感じ取る感覚も含まれている」と定義されている。

（２）「記憶」７つの特性

図１は，エビングハウスの忘却曲線と呼ばれている図である。縦は記憶量,横軸は時間を示している。この実験では，三文字の無意味な単語を機械的に暗記した場合，記憶量が時間と共にどう変化するかを見ている。

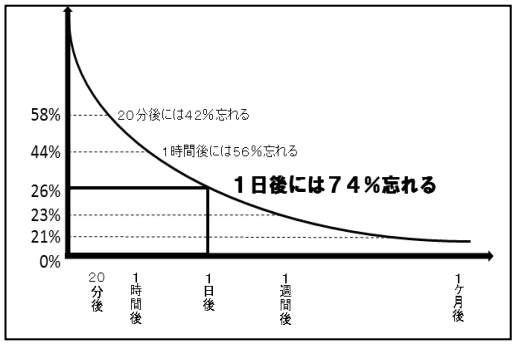

図１「エビングハウスの忘却曲線」
「ごまかし勉強（上)」藤澤（2002）
をもとに筆者作成

グラフでわかるように，時間が経つにつれて記憶内容はどんどん消えていってしまう。

藤澤（2002）は，記憶について「自分の言葉で説明しようとすると，頭の中で深い処理をせねばならない（このときの頭の働きを『創出システム』と呼びます)ので,記憶によく残ります」と述べている。

藤澤は，記憶について７つの特性を挙げている（表１)。

表１「記憶」７つの特性

① 意味を理解すると憶えやすい。
② 新しい知識は，既存の知識網に統合されると憶えやすくなる。
③ イメージと結びついていると憶えやすい。
④ 自分から気づいたことは，教わったことより憶えやすい。
⑤ 記憶対象は，その提示位置による影響を受けやすい。
⑥ 憶えようと意図すると，憶えやすい。
⑦ 自分で書いたり，説明したりすると憶えやすい。

「ごまかし勉強（上)」藤澤（2002）
をもとに筆者作成

（３）言語事項を作文で指導

野口（2005）は,「言語事項を身につけさせるためには作文指導という場はきわめて重要である」と述べている。「あくまでも，ここでいう『身につけさせる』というのは,『定着，応用，実践』の意であって,『獲得，理解』の意ではないということである。言語事項の獲得や理解は，他の領域でなされるべきであって，表現領域でなされるのは，それら獲得，理解された言語事項の定着，応用，実践なのだということなのである」と，言語事項を作文という表現領域で指導することの重要性を述べている。

「日本語は曖昧な言語だ」と言われる一方で,「日本語ほど正確な表現が可能な言語はない」という考え方もある。

「見る」という動詞ひとつを取っても,表２のように様々な類義語がある。

表２「見る」の類義語

眺める・にらむ・のぞく・狙う
望む・探す・捜す・調べる・垣間見る
観察・発見・一瞥・凝視・注目・直視
一望・俯瞰・確認・目撃
盗み見る・眺め入る・のぞき込む
確かめる・照らし合わせる・見合う
見上げる・見入る・見受ける・見失う
見下ろす・見落とす・見返す・見掛ける
見極める・見比べる・見過ごす・見通す
見とれる・見届ける・見なす・見張る
目に付く・目を落とす

「Weblio類語辞書」(2018) をもとに筆者作成

国語教育において優れた実践を行なってきた大村はま（1906-2005）は，その日本語の特徴に注目し「このことばこそ」と題した「言語事項を身につけさせるための作文指導」を積極的に行っていた。

表３「このことばこそ」の流れ

１ 類義語や多義語等のいろいろな表現のあることばをたくさん集める。
２ 集めたことばの意味・用例が並べられた一枚の一覧表を作る。
３ 二人一組で一つのことばを担当する（秘密）。
４ 担当したことばが使われたら，ぴったりだという場面を表現した一遍の作文を書く。
５ 完成した作文を一組ずつ発表し，ここで使われたら適切なのはどのことばかと問いかける。
６ 聞いている生徒は，一覧表を見ながらこれと思う表現を選ぶ。
７ 全員で話し合い，検討する。

「大村はま国語教室９」大村(1991)
をもとに筆者作成

その著書において，生徒が楽しく，豊かにことばを学んでいく様子が描かれている。また，先に例を挙げた「記憶」7 つの特性』の①・③・④・⑦の要素が組み込まれている実践である。

まず,「①意味を理解すると覚えやすい」である。そのことばを文章の中で使うには，意味を理解していないと使うことができない。著書には，生徒が辞書を引いたり，ペアで相談したり試行錯誤するとともに，時に大村に指導を仰ぐ場面が紹介されている。

次に「③イメージと結びついていると憶えやすい」である。大村はこの作文の課題を提示する際,「担当したことばが使われたら，ぴったりだという場面を表現した一遍の作文を書くのです」と指示した。「場面の表現」はまさに，「イメージとの結びつけ」である。

次に「④自分から気づいたことは，教わったことより憶えやすい」である。頭の中で「ああでもない。こうでもない」と思索を重ねている時に「語感や言葉の使い方に対する感覚」に「自分で気づき」定着につながるのではないだろうか。

最後に「⑦自分で書いたり，説明したりすると憶えやすい」である。大村はこの実践の最後に作文の発表会を行っている。そして，ただ発表させるのではなく，そのことばが本当に「ぴったり合っているか」ということを学級全体で話し合わせている。発表する生徒がそのことばについて説明責任があると同時に，それに賛成したり異を唱えたりする生徒も，その説明が問われる仕組みになっている。

一方で，この実践の改善点について検討する。全体での話し合いの際に，発言が一部の生徒に偏りはしないだろうか。大村ほどの実践家だからこそ，全員に発言の機会を与え，全体での共有が実現できたことも考えられる。優れた実践とは，多くの教師が再現が容易で，かつ汎用性のあるものだと考える。この実践を参考にしつつ，その視点を踏まえた授業計画を組み立てる。

2　研究内容２

（１）メタ認知

メタ認知は，「モニタリング」「コントロール」「メタ認知的知識」という３つの働きから成り立っている。

「モニタリング」は自分の思考が正しく働いているか監視する働き。「コントロール」は，モニタリングの結果を受けて適切な修正を加える働き。「メタ認知的知識」は，いま取り組んでいる課題や，そこでの自分の取組み方に関わる知識を振り返る働きのことである。

佐藤（2014）は，図２のような実験を行なった。

佐藤がこの実験を中学生に行なったところ，なかなか相手に伝わる説明を書けなかったが，相手が描いた図形を説明者に見せると，それを参考にしながら，前よりもわかりやすい説明に直すことができた。そして，こうした経験をすることで，次に初めて見る図形についても，相手に伝わる親切な説明を書くことができるようになった。

一　ある図形を説明する文章を書いたり，あるいは口頭で説明してもらう。
二　説明を受けたもう一人の方は，その説明に従って図形を描く。
三　示した図形が描けたかどうかを調べる。

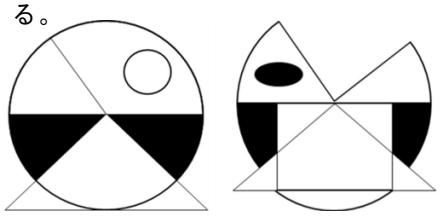

図２「メタ認知」の実験
「学習支援のツボ」佐藤(2014)をもとに筆者作成

佐藤はこの実験で，相手を意識しながら自分の文章を見たり，相手からの評価を受けて見直したりしたことが「モニタリング」にあたり，その結果をふまえて適切に修正したことが「コントロール」にあたるとし，「相手を意識したり，相手に確認するということは，他者の眼を借りてメタ認知を働かせるということになります。他者の眼を借りることは，メタ認知を育むのにとても有効です」と述べている。

この「メタ認知」の働きを授業において組み込んでいく。詳細については後述する。

（２）アクティブ・ラーニング

図３は，平成 27 年８月に公表された，教育課程企画特別部会「論点整理」（補足資料）の一部である。ここには，これからの時代に育成すべき資質・能力が「三つの柱」として整理されている。

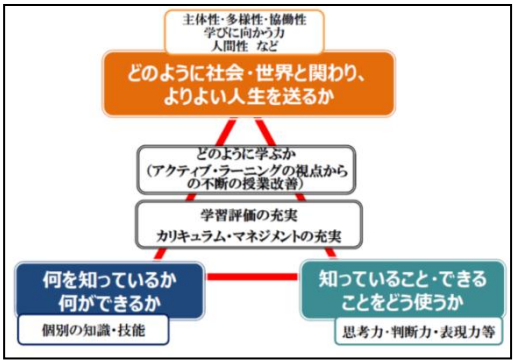

図３　育成すべき資質・能力「三つの柱」
教育課程企画特別部会「論点整理」
（補足資料）より

このうち，「主体性・多様性・協働性，学びに向かう力，人間性」については，「多様性を尊重する態度と互いのよさを生かして協働する力，持続可能な社会づくりに向けた態度，リーダーシップやチームワーク，歓声，優しさや思いやりなど，人間性等に関するもの」と説明されている。

冨山（2016）は，「このような資質・能力を育成するためには，生徒が学習する必然性を感じ，切実感をもって取り組む教材・題材が必要である」としている。

冨山はアクティブ･ラーニングの視点として表４の５つを挙げている。

表４「アクティブ･ラーニング」５つの視点

Ａ 生徒が興味をもつ教材･題材と魅力的な導入（日常生活･社会生活との関連）
Ｂ 課題解決的な学習，既習事項を活用する学習
Ｃ 学習の見通し，本時の目標の明示
Ｄ 自分の考えを発表・交流する機会
Ｅ 「できた」「わかった」の実感，「できたこと」「わかったこと」の振り返り

中学校国語科「アクティブ･ラーニング」冨山(2016)より

この冨山が挙げた「５つの視点」を土台に，アクティブ･ラーニング型「このことばこそ」を展開する。

まず，「Ａ　生徒が興味をもつ教材・題材と魅力的な導入（日常生活・社会生活との関連）」である。本研究の当該学年である本校の中学２年生は 11 月末に関西への修学旅行があった。中学生にとって，入学当初から楽しみにしている行事で，卒業後もずっと記憶に残り続ける行事の一つである。

この行事を題材に，文章の中に「故事成語」を使用する旅行記を書かせる。旅行記を書かせる時，教師側が期待しているのは，行った場所の羅列や行動の羅列といった，全員が同じ内容となってしまうような書き方ではなく，みんなが「同じ体験」をしていても一人一人が「異なる視点」で捉えた，個性豊かな場面の描写である。

とは言っても，それは中々難しい。その時，「どう」心が動いたのか，という視点が必要だからである。そこで視点を与えるのが「故事成語」である。自らの心の動きを，たくさんの「故事成語」の中から選ぶ過程において，その「視点」の輪郭がはっきりしていくことにつながると考える。

次に，「Ｂ　課題解決的な学習，既習事項を活用する学習」である。この学習場面において，「このことばこそ」を展開する。では，「ことば」をどうするか。一つは先に例を挙げた「見る」の類義語とする。生徒は２泊３日の旅の中で色々なものを「見る」。その「見る」という行動を，どう「見た」のか意識させ，作文を書かせる。

加えて，「驚く」の類義語を採用する。「見る」は行動を表す動詞，「驚く」は感情を表す動詞である。何を，どう「見た」時に，心はどう「驚いた」のか。「見る」「驚く」の類義語で，「行動」と「感情」を具体的に描写させる。

次に，「Ｃ　学習の見通し，本時の目標の明示」である。今回の題材は修学旅行である。その感動が，時間の経過とともに薄れてしまう前に作文を書かせることが望ましい。そのため，事前指導である第１時～第３時を修学旅行の出発前に終え，帰ってきたらすぐに作文に取り組めるように単元の最初に単元全体の見通しを示し，より主体的に学習活動が展開されるようにする。

（３）対話的な学び

次に「Ｄ　自分の考えを発表・交流する機会」である。しかしその前に，アクティブ･ラーニングの３つの視点の一つ，「対話的な学び」について，少し立ち止まって考えてみたい。

なぜ今，「対話的な学び」なのか。

前出の「論点整理」においては，「急速に情報化が進展する社会の中で，情報や情報手段を主体的に選択し活用していくために必要な情報活用能力，物事を多角的・多面的に吟味し見定めていく力（いわゆる「クリティカル・シ

ンキング」)，統計的な分析に基づき判断する力，思考するために必要な知識やスキルなどを，各学校段階を通じて体系的に育んでいくことの重要性は高まっている」と説明している。

グローバル化した高度情報社会において,「クリティカル･シンキング」は，今後学校が育んでいかなければならない力であることを改めて考えさせられる。

では,「対話的な学び」の学習効果についてはどうだろうか。

「学習の輪―アメリカの協同学習入門」では，協同学習の目的は「各メンバーを強い個人にすることにある」としている。

そして,「競争学習」「個別学習」に比べ,「協同学習」の方が「そこで行なわれる推論の水準が高く，新しいアイデアや解法をより多く生み出すことができ，一つの場面で学んだことを別の所に拡張していくという学習の転移がより広く生じた」とし,「協同学習の優越性が大きくなる時」を表５の様にまとめている。

表５「協同学習の優越性が大きくなる時」

ｱ 学習目標がきわめて重要な時
ｲ 課題が複雑であったり概念的で有ったりする時
ｳ 問題解決が要求される時
ｴ 拡散的思考や創造性が求められる時
ｵ 質の高い成果が期待される時
ｶ 高いレベルの推論や批判的思考が要求される時
ｷ 学習内容を長時間保持させる必要のある時
ｸ 生徒の社会性の発達が重要な指導目標の一つとされる時

「学習の輪―アメリカの協同学習入門―」
D･W･ｼﾞｮﾝｿﾝ/ R･T･ｼﾞｮﾝｿﾝ/E･J ホルベック（1998）
をもとに筆者作成

では，人数はどうだろうか。

「学習の輪」の記述を要約すると「学習グループが大きくなると，知識・能力・人手・才能が増える一方で，グループが大きくなるほど，全員に活動や発言の機会を与えるのが難しくなる」と述べている。その上で「グループの大きさは，利用可能な教材ないしは課題の性質によって決まる」とし「協同学習のグループとしては，おそらく６人が上限である」としている。

「協同学習の優越性が大きくなる時」（表５参照）の,「ｲ 課題が複雑であったり概念的であったりする時」「ｴ 拡散的思考や創造性が求められる時」「ｵ 質の高い成果が期待される時」を踏まえ，「このことばこそ」は大村はまの原実践同様に，２人ペアで書かせる。

「ことば」は概念を言語化したものである。ひとつの概念について一人で思いを巡らせるのは難しい。「自分はこう考えるけど,あなたはどう考える？」と互いの考えを述べ合うことで，拡散的思考が働き，そのことばにあった互いの経験を思い出したり，場面を創造したりし，それを文章にまとめることで，質の高い作文となることを期待する。

上記の事前指導を修学旅行前に終えておき，帰ってきたらすぐに「故事成語」「『見る』の類義語」「『驚く』の類義語」を使用させながら，修学旅行記を書かせる。

その際には一人で書かせる。「学習の輪」で述べられているように「協同学習の目的は各メンバーを強い個人にすること」だからである。事前の協同学習で学んだことが身についているか，生徒自身が確認する場面であるとともに，教師が捉える場面とする。

単元の終末の場面においては,「メタ

認知の特徴」「協同学習の特徴」を取り入れながら,それぞれが書いた作文「修学旅行記」の交流会を４～５人のグループで行う。クリティカル・シンキングを高めるとともに，全員に活動や発言の機会を与えることができるグループの大きさで活動する。

冨山は「双方向性のあるコミュニケーション」の学習効果として「異なる考えを聞いて自分の考えが広がったり,同じ考えを聞いて自分の考えの根拠がいっそう明確になったりする変化が期待できる」と述べている。

また,佐藤は,「メタ認知の実験」(図２参照)を踏まえた上で「自分の文章を冷静に見直すことは難しい。そこで友だちに推敲してもらったり，友だちの書いたものを推敲することで，モニタリングやコントロールの力がつく」と述べている。

友だちの作文を推敲することは「こんな間違いをするんだ」「この表現はわかりにくい」「こう書けばいいんだ」等,多くのことを学ぶ機会になる。

佐藤は,「友だちに推敲してもらうこと，友だちの書いたものを推敲すること，これら両方向の活動がメタ認知を育むことにつながる」と述べている。

一方で佐藤は,「話し合い」には表６のような配慮が必要だということも述べている。

表６「話し合い」の際の配慮事項

ア　話し合う必然性のある課題の設定
イ　どの子どもも考えをもてるような支援
ウ　教師からの十分な説明，具体的な指示
エ　個人で考える時間の確保
オ　考えるための道具の用意
カ　道具の使い方の周知

「学習支援のツボ」佐藤(2014)をもとに筆者作成

しかし，グループ活動においては，個々の子供の考えがどのように広がったり深まったりしたのか，教師が捉えにくいという側面もある。

冨山は「これを補うのが，ノートやワークシートの工夫である。わかったことや考えたことを，グループ学習の前後で分けて記述したり，影響を受けた人の名前をメモで加えたりする工夫が効果的である」としている。さらに「なぜ」「どこが」「どのように」と具体的に記述をさせることの重要性を述べている。

以上のことを踏まえ，図４が作成したワークシートの一部である。

	作文を書いた人	10点	合計
1	読みたくなる題名である。		
2	故事成語が効果的に使われている。		
3	表現技法が効果的に使われている。		
4	「見る」「驚く」の類義語の使い方が的確である。		点

上の点数を付けた理由「どれの・どこが・なぜ・どのように」(三行で。一行１点。)

図４　交流シート

上段は,条件として挙げた「ことば」を直感的に点数で評価する部分である。そして，下段ではその点数を付けた根拠を「どれの・どこが・なぜ・どのように」と具体的に記述をさせる。ここで，佐藤が述べる「友だちに推敲してもらうことによる,モニタリング代行」を行わせる。

このワークシートは回収し、授業内の観察だけでは捉えられなかった，個々の考えの広がりや深まりを授業後に確認する。その記述に「この『ことば』は素晴らしい。なぜなら…」という考えや,「この『ことば』よりあの『ことば』の方がよい。なぜなら…」という考えがあらわれることを期待している。交流活動の中で級友の「ことば」に着目し，その語感について考えることができたならば，それをこの授業においての「変容」と捉えることとする。

3　研究内容３

（１）振り返り

次に「E『できた』『わかった』の実感,『できたこと』『わかったこと』の振り返りである。

冨山は「『メタ認知』を授業内容の範囲にとどめることなく，日常生活・社会生活へ広げるところまで含めるようにする。それにより，授業が終わった後もアクティブに学んでいく姿勢が育まれるのではないだろうか」と述べている。

日本語は膨大な「ことば」が存在する言語である。それら全てを授業の時間だけで獲得させようとすると，途方もない時間が必要となってくる。授業で育まれるべきは,「日常的に『ことば』に興味や関心を持ち,『ことば』を探し,『ことば』を集め,『ことば』を選ぶ意識」なのではないだろうか。それが冨山の言う「アクティブに学んでいく姿勢」だと考える。

この授業計画においては「語感や言葉の使い方に対する感覚を意識」させ,文章を書かせ，交流を行い，振り返りをさせる。そうした活動を授業において仕組むことで，やがて日常生活においても自分の「ことば」,他者の「ことば」について,「語感や言葉の使い方に対する感覚を意識」するようになり,「さっき話したことばで合っていたのだろうか」「他にもいいことばがあったのではないか」「次はもっと適切なことばを選ぼう」と考えるようになることを期待する。

（２）パフォーマンス評価

教育課程審議会答申（平成 12 年 12 月）では「指導と評価の一体化」が重要であり，評価は,「自らの学習状況に気付き，自分を見つめ直すきっかけとなり，その後の学習や発達を促すという意義がある」としている。

「指導と評価の一体化」を考えるに当たり，足がかりとなりそうなのが,思考力などを測れる「パフォーマンス評価」である。

松下（2009）は，その仕組みはフィギュアスケートの評価方法と似ているとし、「フィギュアスケートでは，専門家が実際の演技の過程を見て，一定の基準に沿って採点します。同様にパフォーマンス評価も,『パフォーマンス課題』に取り組ませることで，子どもの学力を『見える』ようにし,『ルーブリック』という評価基準を使って評価します」と述べている。

3	2	1
3つの鑑賞文例比較することで，情景や心情を書き入れた大意の方が他者にわかりやすいということが理解できている。また，作者が五感でかんじたであろうことをブレーンストーミングによってイメージを広げることができている。その際，万緑（木々の中），寄子（我が子），歯など句中の言葉と「そよく風」「葉ずれの音」「日光」などのイメージを広げる言葉を使って場所や状況がわかる大意や作者の我が子への思いを表現した大意を書くことができている。また，イメージを広げる言葉を使う際，その言葉を意味が通るように取捨選択したり，他の語に変えたりしている。	鑑賞文を比較することで，情景もしくは心情を入れた大意の方が他者にわかりやすいということが理解できている。また，五感シートを活用し，イメージを広げることができている。大意を書く際，鑑賞文例を参考にし，場所や状況もしくは作者の心情を入れた大意を書くことができている。また，情景を考える際，ブレーンストーミングで出された言葉で情景を考えている。	鑑賞文例を比較することで，情景もしくは心情を入れた大意の方が他者にわかりやすいということが理解できている。また，五感シートを活用し，イメージを広げることができている。大意を書く際，ヒントカードを利用しながら大意をまとめている。

図５　ルーブリックの例
「パフォーマンス評価―思考力･判断力・表現力を育む授業づくり―」田中(2011)をもとに筆者作成

テストの在り方を研究している鈴木（2011）は,「テスト観」を表７のように示した。

表７　生徒のテスト観

改善的	テストは自分がどれくらい理解できているかを確認するためものものだ
誘導的	テストは学習計画を立てるのに役立つ
強制的	テストは勉強を強制するものだ
比較的	テストは人を選別するものだ

「ルーブリックの提示による評価基準・評価目的の教示が学習者に及ぼす影響」鈴木(2011)をもとに筆者作成

その上で，テストにルーブリックを添えて返却するクラスと，添えずに返

却するクラスを分けた。そうすると，ルーブリックを提示することが生徒のテスト観に影響し，表８のような変化を引き起こした。

表８　ルーブリックを添えた生徒の変化

ⅰ 最終日（５日目）のまとめテストで高い成績を収めた。
ⅱ 「授業を楽しく受けた」「もっと難しい問題に挑戦したい」など，内発的動機づけが高まった。
ⅲ 理解重視の学習方略が強まり，暗記型の学習方略が弱まった

「ルーブリックの提示による評価基準・評価目的の教示が学習者に及ぼす影響」鈴木(2011)をもとに筆者作成

この結果は，その単元で何を学ぶことが大切なのか，どういうことができるようになればよいかということを，あらかじめ生徒が知ることで，生徒の理解や意欲に影響があることを示している。続けて佐藤は，教師にとっても，「授業の目標がより明確になる」「児童生徒の学習状況や実態を，より的確に捉えることができる」という２つの意味でプラスになると述べている。

例えば国語科において「文章を書くことに苦手意識をもっている」という表現は頻繁に使われるが，表９のように様々な現状がある。

表９　国語を苦手と感じる様々な現状

●何を書いていいのかわからない。
●書く内容は思いつくが，どう構成したらいいかわからない。
●いつも短い作文になって，詳しい説明が書けない。

「学習支援のツボ」佐藤(2014)をもとに筆者作成

佐藤は「評価規準を具体的に『～～ができる』という形で表現することで，児童生徒の現状の把握も，授業の目標も，目標に向かうために取るべき手立ても，より明確になるはずです」と述べている。

松下（2009）はパフォーマンス評価の流れを以下のように説明している(表 10)。

表 10　パフォーマンス評価の流れ

A 事前に予想される解法をリストアップしておく。
B 複数の教師で採点し，得点やその理由をつき合わせる。
C 採点と平行して，ルーブリックの各レベルの状態を埋めていく。
D ある程度，採点を進めるとルーブリックがほぼでき上がるので，それを基に採点を続ける。
E 新しい考え方が見られた場合，ルーブリックに追加する。

「『パフォーマンス評価』によって子どもの中に培われた思考力と表現力が見える」松下(2009)をもとに筆者作成

しかし，ここで注意すべき点は，採点が目的ではなく，一人ひとりの思考過程を見ることが大切だということである。松下は「同じ得点でも解答の内容は異なりますから，単純な得点の比較に意味はありません。各観点の得点を合計すると，どの観点が弱いのかが見えにくくなるので，注意してください」と述べている。

国語科の授業においては,「作文」「発表」「報告」「スピーチ」といった学習内容を活用する場面がある。しかし，それらを評価する際に，数量または，教師の主観や直感で判断してしまう事が多々あった。

パフォーマンス評価は，生徒がその単元で何を学ぶことが大切なのか，どういうことができるようになればよいかということを知ることができ，理解や意欲の向上につながる。教師にとっても授業目標の明確化，生徒の学習状況の実態把握につながる。本研究では，この評価方法の効果について検証する。

Ⅳ 検証授業

第２学年　国語科学習指導案

平成 30 年 12 月５日（水）　４校時
宜野湾中学校２年６組　男 19 人・女 19 人 計 38 人
授業者　　大城　荒
指導助言者　　武藤　清吾

１　単元名

「修学旅行記」を書き，互いに読み合い，意見を述べたり助言したりして，自分の考えを深めたり広げたりするとともに，語感を磨き語彙を豊かにしよう。

２　単元の目標

○　作文を読み合い、表現の工夫とその効果などについて，意見を交流し、自分の考えを広げることができる。［Ｂ(1)オ］
○　互いの作文を読み，理解したことや考えたことを説明したり文章にまとめたりすることができる。［Ｃ(2)ア］
◎　類義語や故事成語などについて理解し，話や文章の中で使うことができる。
［（1）言葉の特徴や使い方に関する事項(1)エ］

３　単元について

（１）教材観

本単元では、前の週に体験した修学旅行という身近な学校行事を題材に「見る」「驚く」という言葉の類義語を使うとともに、その文章の内容に合った故事成語を添えながら旅行記を書かせることで、理解語彙（意味を理解しているだけに留まっている語句）を表現語彙（話や文章の中で使いこなせる語句）にすることを目指す。

また、作文を書き終えたのちに、観点を示し相互評価・自己評価させることで、互いの文章の良さや改善点を知り、次の自分の書く活動へ生かす具体的な視点を得ることができる教材である。

（２）生徒観

全国学力・学習状況調査における本校の課題として、「言語についての知識・理解・技能」が挙げられる。日常生活においても、会話の中で語彙の少なさが感じられる場面もあるが、それでも会話が成り立つ場合が多いので、意識的に語彙を増やす必要性を感じずに過ごすことが多いと考えられる。

（３）指導観

本単元の重点指導事項を「類義語や故事成語などについて理解し，話や文章の中で使うこと」とした。この単元で取り上げる故事成語、「見る」「驚く」の類義語は、いずれもこれまでの既習事項であり，知っている語句である。しかし一方で、生徒が普段あまり使わない語句である。この単元では、そういった語句に目を向けさせ、適切な語句を使うと描写が鮮やかになるということを実感させるとともに，表現活動（アウトプット）を通して，語句についての理解を深めさせたい。さらに、書いた文章を互いに読み合い、意見を交流させることで、互いに語感を磨き語彙を豊かにする活動としたい。

４ 単元の評価規準

関心・意欲・態度	話す・聞く／書く	知識・理解・技能
○　描写や展開の仕方など、読みたくなるしくみを工夫しながら作文を書くことができる。	○　伝えたいことを話したり，それらを聞いて質問したり助言などをすることができる。［Ａ(2)ア］ ○　作文を読み合い、表現の工夫とその効果などについて，意見を交流し、自分の考えを広げることができる。［Ｂ(1)オ］	◎　類義語や故事成語などについて理解し，話や文章の中で使うことができる。 ［（１）(1) エ］

5 単元の指導計画・評価計画

時間	主な評価規準〔観点〕 ◎：単元における総括の資料とするための評価 ○：学習指導の過程における評価	【　】内は観点 評価方法及び 支援が必要な生徒への手立て	主な学習活動 (本時の主な問題・課題)
1	○故事成語を使った短作文を書くことができる。	【知識・理解】① ワークシート、観察 ペア学習，学習の手引き ヒントエピソード	○故事成語を使って体験文を書く。
2	○「見る」の類義語を使った短作文を書くことができる。	【知識・理解】② ワークシート観察 ペア学習，学習の手引き	○「見る」の類義語を使って体験文を書く。
3	○「驚く」の類義語を使った短作文を書くことができる。	【知識・理解】③ ワークシート、観察 ペア学習，学習の手引き	○「驚く」の類義語を使って体験文を書く。
4	○前時までに学習したことばを用いながら旅行記を書くことができる。	【書く能力】① ワークシート、観察 学習の手引き	○旅行記を書く。 ○旅行記の途中段階を回し読み交流する。
5 本時	◎友だちが書いた旅行記を読み、「ことば」に着目した意見を述べることができる。	【話す能力】① ワークシート、観察 グループ学習 机間巡視，学習の手引き	○完成した旅行記を読み合い、意見を交流し、自分の考えを広げる。

6 本時の指導

「旅行記を読み合い、意見を交流することで，語句についての理解を深めよう。」（5／5 時間）

（1）ねらい

友だちが書いた旅行記を読み、「ことば」に着目した意見を述べることで理解を深める。

（2）本時の評価規準

評価の観点	知識・理解
評価規準	友だちが書いた旅行記を読み、「ことば」に着目した意見を述べることができる。
評価方法	授業内：観察、ワークシート 授業後：ワークシート

（3）「めざす子どもの姿」の実現に向けた授業改善(教材・発問・問い返し・過程の工夫等)

場　面	工夫点（発問等）	子どもの姿
主体的に「問い」をもち、自分なりの考えをもつ		
前時までに学習したことばを用いながら旅行記を書く場面	「あなただけが知っている修学旅行記を，前時までに学習したことばを使って書いて下さい」 「読み手はクラスメイトです」	これまでの学習を活かして、語句の持つ語感を意識しながら自分自身の体験を書く。
他者との交流を通し、「問い」が生まれ自分の考えを広げ深める		
他者の旅行記を読み、相互評価する場面	「ことばの効果について評価，助言をしてください」 「話し言葉でいいです。箇条書きでいいです。」	他者の旅行記を読み、表現の工夫とその効果などについて、自分の考えをもち、ワークシートに記入する。
学びの過程を振り返り、新たな「問い」をもつ		
他者の助言を踏まえ、自分の文章のよい点や改善点を記入する場面	「あまり難しく考えず、思ったこと考えたこと感じたことを書いてください。話し言葉でいいです。箇条書きでいいです。」	他者の助言を踏まえ、自己評価を記入している。ワークシートに記入した自己評価を発表する。

（4）展開

過程	学習活動・内容・発問等	予想される生徒の反応	指導上の留意点、評価等
導入 10 分	修学旅行の作文を互いに読み合い、「ことば」を磨き合おう。		
	・漢字マッキーノ	意欲的に漢字学習に取り組む	
	・提出された創作文返却	・旅行記を書けていない生徒が数人いる	・旅行記が書けていない生徒には、他クラスの旅行記を貸す。
	・ワークシート配布 ・授業の流れの確認		・電子黒板で提示し、簡潔に説明する。
	めあて　旅行記を互いに読み合い、表現の工夫とその効果などについて、 相互評価することを通して、自分の旅行記の良い点や改善点を見いだす。		
展開 25 分	・４人グループを作り、５分交代で、互いの作文を読み合い、相互評価をする。 （１５分）	・大多数は静かに読んでいる。 ・グループを超えて私語を始める人が出てくる。	・授業の流れをいつでも確認できるように、電子黒板に映し出しておく。 ・机間巡視しながら、ワークシートの記入の仕方をサポートする。
	・互いに評価の内容を発表する。（５分）	・次の活動がわかっていないグループが出てくる。	・電子黒板で確認する。
		・早く終わるグループが出てくる。	・早く終わったグループは次の課題に進むように指示する。
	・グループの代表者に作品を発表させる。（５分）	・推薦する声があがる。	・発表しやすい雰囲気づくりをする。 ・発表したい生徒に挙手を促す。 ・挙手する生徒がいない場合は指名する。
まとめ 15 分	まとめ　自分の作文の良い点や改善点を見いだす。		
	・自己評価を書く。 （５分）	・自己評価表に振り返りを記入している。	
	振り返り　他者と意見を交流し、「ことば」について新しい発見があったか。		
	・振り返りを互いに発表する。（５分） ・グループの代表者に感想を発表させる。（５分）		・発表したい生徒に挙手を促す。 ・挙手する生徒がいない場合は指名する。 考 A話すこと・聞くこと 観察・ワークシート

7 検証授業研究

（1）授業者の反省

この授業において，「表現」→「交流」→「振り返り」という活動の流れを仕組んだ。「ことば」への意識が高まり，日常的にそうした思考の流れを作ることができれば，自然と語彙は広がり，「テストのための語彙学習」ではなく，「人生を豊かにするための語彙学習」になり得ると考えたからだ。

検証授業の中で，生徒は，生き生きと自分の考えを表現し，友だち同士で交流し合っていた。しかし，この授業で学習させたのは，「ことば」という，時に「海」にも例えられる膨大で，しかも時代の流れとともに変化を伴うものである。単発で終えるのではなく，これを継続，拡大，発展させることで，価値のあるものとなり，その成果はさらに得られると考える。このことを自分の中に戒め，今後の実践指導に生かしていきたい。

（2）意見及び感想

生徒が授業に取り組む姿を「子ども達が集中して，いい授業だった」「授業規律の面でも，習得の面でもグループでフォローし合っていた」「教師と生徒の信頼関係が感じられた。反応がよい。教師に正対しており，指示が通っている」「作文を読んで，ワークシートを書く。子ども達が共書きができていることが授業の強み。日頃の指導の良さ」「年間を通してやっていることで，言い合える雰囲気ができている。何がよいか，悪いか内容に踏み込んでいる」「先生が教えるのも良いけど，子ども同士で学び合うことが大切と改めて感じた」「一人一人，視点も書き方も言葉も違うという発見のある授業だった」とたくさんの言葉をいただいた。

また，授業の展開や工夫について「学習形態の工夫，教師の工夫，電子黒板や板書等，視覚的な工夫が見られる授業であった」「ワークシートがとてもよい」「事前指導が適切に行なわれており，本時においても，仕組んだことができていた」「授業の流れが計画的でメリハリがあり，時間が短く感じた」「言葉を意識化して，言語化するという，こうした学習活動を続けることで，学力は自ずと伸びる」「国語力を高めることで他教科も伸びる」「他教科にも示唆を与えられるような研究にしてほしい」「こういう手立てを小学校の先生にも見てもらいたい」と言っていただいた。

質問や課題としては，「情報の扱い方，学習過程の明確化，今日の授業を終えた後に，自分がどういう力を身に付けているのか。どう育っているのか。自覚させることが大事。それが，他教科においても書く力・表現する力になる」「話し方・聞き方の指導を丁寧にすれば，もっと引き締まったよい授業になると思う」「最後の発表は共有する場にするべき。グループ内でどういうコメントが出たかを全体で発表させることで，もっとねらいに迫ることができたのではないか」「ねらいを示し，達成できたかどうかを確認することが大事。子ども達が何を学び，何ができるようになったのかを確認するのは，メタ認知を育成する上でも重要」との指摘もあった。

（3）指導助言　（琉球大学教育学部教授　武藤清吾氏）

良い点は，「語彙を習得するには，実際の生活の中で学んでいくことが大切。それに気付いたすばらしい実践だった。言葉は使えば使うほどフィクション化する。自分の言葉に創造力がついてくる。聞いていると，将来小説家になれるのではないかと思うほどだった。それを他者と交流させるという指導方針がよかった。中２の秋の到達点としては，高いものがあった。行事作文を書かせると，時系列になりがちだが，様々な条件を使いながら，感じたこと考えたことを書かせたのが良かった。グループで程度の差はあるが，かなりの成果があった。いいレベルで学びが育っている。『どのように』が大切。それが問い。自分の言葉を作らせる。『どんな』『どのように』それを意識していたのが良かった。それが，思考力・判断力・表現力の基軸になる。実際の生活の場で，一回しか聞くことのできない新鮮な言葉の響きこそが語感。その語感を育てている。だからこそ，子どもたちは，あの授業が楽しい。だからこそコメントもたくさん書いている。意欲を喚起している。これを継続指導することで，子どもたちはさらに伸びる。語彙指導を継続してほしい」との言葉をいただいた。

課題としては，「話し方・聞き方を指導に位置づけた方がよい。中２は難しい学年だが，指導した方がよい。社会に出たときのコミュニケーション能力や他教科の学習にも生きてくる。また，漢字の一点一画の指導も大事。沖縄は書を大切にしている。そんな地域は他にない。その地域の良いところをさらに伸ばすことを期待しています」との指導助言をいただいた。

Ⅴ　仮説の検証

検証授業後に，学習の過程ごとに質問事項を配列した，30 項目のアンケートを行なった。４つの選択肢から，１番自分の気持ちに近いものを選ばせた。

２クラスでアンケートを実施したところ，同じような数値が出ていることから，中学２年生の授業に対する感じ方として，妥当な数値であると考えられる。

本検証に出てくるアンケート結果は，「３　ややあてはまる」「４　よくあてはまる」を選んだ割合をパーセンテージ（%）で示したものである。

本研究では，テーマを「語感を磨き語彙を豊かにする授業の工夫」として，「記憶の特徴」「メタ認知」「協同学習」「パフォーマンス評価」の理論を取り入れ，仮説に基づいて研究を行ってきた。授業を通して，どう変容したかを，授業実践，生徒観察，ワークシートや自己評価の記述，生徒の作文，アンケート調査結果から検証を行なった。

仮説：「言語について」学習する場面において，語感や言葉の使い方に対する感覚を意識して作文を書き，読み合う活動をすることによって，日常生活において語感を磨き語彙を豊かにするようになるであろう。

１　理論の有効性の検証（全体）

（１）「記憶の特徴」から見える変容

今回、「『記憶』７つの特性」を意識した授業づくりを行なった。

第１時の前半は作文を書く活動，後半には作文の発表会を行なった。生徒の振り返りを見る。

知らない故事成語をみんなが考えたおもしろい文で理解することができた。
出藍の誉れの意味を知れた。完璧が故事成語と分かってびっくりだった。故事成語をもっと学びたいと思った。
「見る」にも、いろんな類義語があり、それぞれ違った使い方ができるっていうのが分かりました。似てる意味でも、使い方に気をつけて使いたいです。
見定めると見極めるの意味をちゃんと読むと、違いにきづけたので、うれしかったです。むずかしい言葉も、理解してよかったです。

以上に示したものだけでなく，ことばへの理解が深まったと同時に，使うことができるようになったという言葉が多くあった。「『記憶の特徴 3』イメージと結びついていると憶えやすい」が作用した結果だと考える。

質　問　　（2年2組と2年6組 N＝76）	%
この授業で初めて知った「故事成語」があった。	97
この授業で初めて知った「『見る』の類義語」があった。	89
この授業で初めて意味を知った「ことば」があった。	94
この授業で使えるようになった「ことば」があった。	86
「ことば」は実際に使うと覚えやすい。	89

自分の考えを書く

アンケート結果を見ると，94%が「初めて知った『ことば』」があり，その 86%が「使えるようになった」と回答している。そして 89%の生徒が「『ことば』は実際に使うと覚えやすい」と回答している。「『記憶の特徴 7』自分で書いたり，説明したりすると憶えやすい」が作用した結果だと考える。表現語彙を増やすには，実際に「語句を話や文章の中で使う」ことが有効であることが確認できた。

（２）「協同学習」「メタ認知」の側面から見える変容

第１時、第２時ともに，作文を書かせる際，２人ペアとした。「協同学習の優越性が大きくなる時」に合致すると考えたからである。授業中の生徒観察においても，２人で，互いの経験を思い出したり，場面を創造したりしながら作文を完成していく様子が確認できた。

質　問	%
2人で作文を書くと，1人の時より書きやすい。	72
作文は1人の方が書きやすい。	56

ペア学習

アンケート結果を見ると，「１人で書く」より「２人で書く方が書きやすい」が 16 ポイント高かった。この結果から，言葉という概念を言語化したものについて思いを巡らせ、文章をまとめる際には、協同学習が有効であることが確認できた。

第５時においては、４人～５人のグループで、「互いに作文を読み合い、アドバイスし合う」交流活動を行なった。この活動のねらいは，人数を多くすることで、クリティカル・シンキングを高め、「異なる考えを聞いて自分の考えが広がったり，同じ考えを聞いて自分の考えの根拠がいっそう明確になったりする変化」を期待してのものだった。生徒のワークシートを見る。

作文の良さを指摘したアドバイス
題名の「11 月 29 日のクリスマス深夜のサンタ」というのが読みたくなる題名ですごく良かった。みんなが眠りたいけど，一人だけはしゃいでいる状況を四面楚歌の故事成語を使っているのが良かった。
「凍りつく」という言葉が適切だった。なぜなら先生が来るのが３回目でめちゃくちゃ怒っているのを心配している様子が伝わってきたから。
友だちの裏の顔を知って，言葉を失うという表現技法を使うのが，よりいっそうショックとかビックリしていたんだなと連想させられてよかったです。

作文の改善点を指摘したアドバイス
思わず凝視したと書いていたけど，見入るとか眺めるとかも意味が近いから，この方がいいと思う！ キレイで驚嘆って書いていたけど，目を見張るとか圧倒なども使えると思います。
見わたせるほどじゃなくて，見渡すとシカがいっぱいいただといいと思いました。
「呆気にとられる」は，あきれたという意味だから，この作文には合わないと思いました。例えば，言葉を失うとかでもいいなと思います。
文法がちょっとおかしかった。「思い出になったことは～あわてました」→「～あわてたことです」ならいいと思う。 百聞は一見に如かずは「～はキレイときいていたけど，見ると予想以上だった」みたいな使い方がいいと思う。
五十歩百歩は五十歩も百歩も似たようなものだ，的なことなので，「早く行くために走ったけど，遅くなった」はちょっと違うと思います。

等の言葉が見られた。ここでは,「他者の眼」によって文章の推敲が行われていることが確認できる。作文の良さをアドバイスされた生徒は，自信に繋がったと考えられる。作文の改善点をアドバイスされた生徒は，今後の自分自身の表現語彙に反映していくと考えられる。また，アドバイスをした生徒は,「こんな間違いをするんだ」「この表現はわかりにくい」「今度このことばを使ってみよう」等，今後の自分自身の表現語彙に反映していくと考えられる。

質　問	%
同じグループの人の作文にアドバイスをすることができた。	72
同じグループの人に作文のアドバイスをもらった。	82
同じグループの人のアドバイスは参考になった。	84
自分と同じ考えの人がいてうれしかった。	68
自分と違う考えの人の意見を聞くことができてうれしかった。	90

グループ学習

アンケート結果を見ると,グループの人からのアドバイスに対して,「参考になった」と回答した生徒が 84%と多くいた。その内訳を見てみると「自分と同じ考え」と「違う考え」の意見では,「違う考えの人の意見を聞くことができてうれしかった」と回答した人の方が多かった。人数を多くすることで，クリティカル・シンキングを高めることを期待して教師側が仕組んだ活動であったが、生徒自身も「自分と違う考えの人の意見」を聞くことが「参考」になり、今後の自分自身の表現語彙の向上を期待していると考えられる。

（３）「パフォーマンス評価」の側面から見える変容

ここでは，その単元で何を学ぶことが大切なのか，どういうことができるようになればよいかということを，あらかじめ生徒が知ることで，生徒の理解や意欲に影響があったかどうか，パフォーマンス評価の効果について検証する。評価の観点を次のように示した。

評価の観点
①　内容に合った故事成語を使うことができる。
②　表現技法を適切に使うことができる。
③　「見る」の類義語を適切に使うことができる。
④　「驚く」の類義語を適切に使うことができる。
⑤　読みたくなる題名を書いている。

意見の交流

以下は生徒の自己評価である。

実際におきた事を、故事成語を使って、見るや驚くの類義語をつかったりしてかかないといけないというところがむずかしかったが、そこを考えるのがおもしろかったです。
自分の文とかは、類義語とか、表現技法とかをちゃんとつかわれていなかったので、文を書く時は評価の視点に気をつけて書いていこうと思った。

評価の観点を示すことで，意欲の向上や，自分自身の学習状況に対して改善すべき点を把握していることが確認できた。

また，今回，作文を読み合い相互評価を行なった。その評価する過程においても，観点を示していたことで見られる影響が確認できた。ワークシートの友だちへの評価の部分を見る。

Ｋさんのは、表現技法がなかったけど、ちゃんとバスのできごとが書いてて、しかもおもしろいし、題名があったらぜったい１０点あげてる。
Ｒさんと同じで、１つだけおとしていた。表現技法のいみを知らないというおもしろいミスをしていた。（あとでちゃんと直してたから 40 点にしたよ！）
題名，故事成語，表現技法が使われていなくて，もったいないなと思いました。でも見る，驚くの類義語の使い方は適切で良いと思った。

評価規準を満たしているかどうかを互いに語り合った跡が確認できる。

また「あとでちゃんと直してたから 40 点にしたよ！」という言葉から，友だちの評価を受け，改善手続きが行われたことが分かる。

質　問	%
作文を「書くこと」が好きだ。（4月アンケート）	37
作文の「評価の観点」があると，作文が書きやすい。	91
作文の「評価の観点」があると，作文を書くときにやる気が出る。	77

作文の発表

アンケート結果を見ると，「評価の観点があると，作文が書きやすい」と回答した生徒が 91％という数値となっている。また，「やる気」の面においても，77％の生徒が「やる気が出る」と回答している。4 月に行なったアンケートでは，「書くことが好きだ」と回答した生徒は 37％であった。逆に言うと，63％の生徒は「書くことが好きではない」とも言える。

「何を書いたらいいのか分からない」「何が良くて何が悪いのか分からない」という事が苦手意識を高めていることにつながっており，「この作文でどういうことができればいいか」ということをあらかじめ生徒が知ることで，理解や意欲の向上につながるという，パフォーマンス評価の効果が表れた結果となった。

2　授業計画の有効性の検証（全体と抽出生徒）

（１）授業計画の有効性の検証（全体）

第１時には「故事成語」，第２・３時には，「『見る』の類義語」について，短作文を書き，それを発表する学習活動を行なった。

そうしたスモールステップをくり返し，単元の終末の場面である第４時においては、前半の学習内容の定着状況（変容）を捉えるため，部分的に指導してきた学習内容を複合させ，「修学旅行」作文を書く活動を行なった。条件を増やしたことで事前学習よりも難易度は上がったが，ほとんどの生徒が，条件を充たした作文を書き上げることができた。

質　問	%
第1時「故事成語」作文は難しかった。	77
第2時「このことばこそ『見る』の類義語」作文は難しかった。	77
第4時「修学旅行」作文を書くのは難しかった。	60

意見の交流

授業後のアンケート結果を見ると，「難しかった」と回答した生徒が第１時・第２時ともに 77％，「終末の場面」である第４時が 60％となり、苦手意識が和らいでいることが分かる。この結果から，「終末の場面」においては，課題の「ことば」への理解が深まり、表現語彙としての定着が進んだと考えられる。

（２）授業計画の有効性の検証（抽出生徒）

第１時・第２時を「難しかった」と回答し，第４時を「難しく感じなかった」と回答した生徒の中から１人（M さん）を抽出した。学習の過程ごとに M さんのワークシートの振り返りを追って見る。

第１時の振り返り
「塞翁が馬」のように，起きたことが今の自分につごうがわるくても，今起きないともっと大変になってしまっていた可能性があるとプラス思考に考えていくやりかたもあるなととても参考になりました。

第２時の振り返り
「垣間見る」は物や人のすきまから見ることで,「のぞく」は人に気づかれずに見るという,「垣間見る」と「のぞく」の違いがわかった。だから今度から違いに気をつけて言葉を使っていこうと思う。

第４時の振り返り
この作文を書くためにたくさん故事成語を調べたので，いろんな意味を理解することができた。そしてみんなの見る・驚くの類義語をみて，そんな使い方もあるんだーと初めてみる使い方とかもあっておもしろかった。この授業をいかして私のごい力をあげたい。

こうして M さんの３時間の振り返りを並べて見ることで，学習課題の「ことば」への理解が深まっていく様子を確認することができる。

第１時・第２時においては，短作文を書くことによって，自分自身の考え方に反映させていこうとする態度や，細かなニュアンスの違いに気づき，今後の表現語彙に生かしていこうとする態度を捉えることができる。

第４時の振り返りにおいては,自分自身が作文で使用していないことばに対しても,「どのことばを使おうか」と試行錯誤する過程において，その理解が深まっていく様子，互いに作文を読み合う活動を通して，自分自身が気づかなかった使い方を友だちとの交流によって気づいた様子を捉えることができる。

そして「この授業をいかして私のごい力をあげたい」という言葉からは,「ことば」への関心が高まり，日常生活において「語彙を豊かにする」姿勢が育まれたことが確認できる。

３　検証のまとめ

生徒の振り返りには,「日常生活の中で使いたい」「もっと知りたい」「他のことばでもやってみたい」「生活の中で探したい」等の前向きな言葉が多くあった。授業後のアンケートにおいても,「日常会話でも使ってみたい」と回答した生徒が 70%を越えている。大多数の生徒が「覚えたことばは使ってみたい」と考えていることがわかる。

また，授業後に「自分が使っている『ことば』への意識が高まった」と回答した生徒が 83%,「他の人の『ことば』への意識が高まった」と回答した生徒が 78%と高い数値を残した。「表現」→「交流」→「振り返り」という活動の流れが,「日常生活において『語感を磨き語彙を豊かにする』意識の育成」という期待していた変容について，効果的な授業であったことが確認できた。

Ⅵ 研究の成果と課題

1　研究の成果

○「ことば」は，インプット中心の学習にとどまるのではなく，話や文章の中で使うこと（アウトプット）で、記憶の定着が図られ,「定着，応用，実践」につながることが確認できた。

○「協同学習」を取り入れることで，クリティカルシンキングが高まり，概念的なものについて思いを巡らせることに有効であることが確認できた。

○「交流」の場面において,「他者の眼」を借りた推敲を相互に行うことが「メタ認知」を育むことにつながることが確認できた。

○パフォーマンス評価を取り入れることで，生徒があらかじめ，その単元で何を学ぶことが大切なのか，どういうことができるようになればよいかということを知ることが，理解や意欲の向上につながることが確認できた。

○授業後のアンケートにおいて，92％の生徒が「楽しかった」と回答している。情意的な面で効果的な授業だったと考えられる。

2　今後の課題と対応

○相手を思いやることば，相手に正確に伝わることばを選ぶことに課題がある。国語科の授業だけではなく，日常生活全般において，よりよいことばの発信ができる実践を行う。

○既習の漢字が使えていない生徒，字の丁寧さに欠ける生徒がいる。既習の漢字を使う，一点一画を意識して書く，誰が見ても読める丁寧な字で書く等の指導を継続的に行う。

○「話し方・聞き方」に課題がある。国語科は言語活動の根幹であるので，進行の仕方や発表する意義・目的を子ども達に伝え，ポイントを意識した発表をさせるように心がける。また，学級の生徒全員が，もっと気持ちよく発表したり，聞いたりできるようにするための「話し方・聞き方」の指導改善をする。

○「『めあて』と正対した『まとめ・振り返り』」に課題がある。授業で何を学び，何ができるようになったのかを「振り返り」の場で確認することが,「学び」を「深める・広げる」ことにつながる事を意識し，確実に実施する。

〈参考文献〉

藤澤伸介（2002)『ごまかし勉強 上』新曜社

野口芳浩（2005)『作文力を伸ばす，鍛える』明治図書

大村はま（1991)『大村はま国語教室９』筑摩書房

佐藤浩一（2014)『学習支援のツボ』北大路書房

冨山哲也（2016)『中学校国語科　アクティブ･ラーニング』明治図書

ｼﾞｮﾝｿﾝ，D.W.・ｼﾞｮﾝｿﾝ R.T.・ﾎﾙﾍﾞｯｸ,E.J.（1998)『学習の輪―アメリカの協同学習入門―』二瓶社

鈴木雅之（2011)『ルーブリックの提示による評価基準・評価目的の教示が学習者に及ぼす影響―テスト観・動機づけ・学習方略に着目して―』教育心理学

田中耕治『パフォーマンス評価　思考力・判断力・表現力を育む授業づくり』ぎょうせい

文部科学省　『中学校学習指導要領（平成 29 年 7 月告示）解説　国語編』

文部科学省　『教育課程企画特別部会　論点整理　補足資料』(平成 27 年 8 月 20 日）

総務省　平成 29 年版　情報通信白書　情報通信機器の普及状況

沖縄県学力向上推進プロジェクト（平成 29 年版）

〈参考ＵＲＬ〉

https://thesaurus.weblio.jp/『Weblio 類語辞典』